別記様式第４

論文の要旨

ふ　り　が　な 氏　　名	うしろかわ　ともみ 後　川　　知　美　　㊞
論　文　題　目	ヘンリー・ジェイムズの小説観と道徳意識

論文の要旨

ヘンリー・ジェイムズが理想とする小説は、彼が「小説の技法」において、「深遠な作品は決して浅薄な精神から生まれず、作者の道徳意識が優れていれば、小説も優れた芸術性を備える」と主張したように、道徳意識と芸術性が切り離せないものであった。そこで本論では、ジェイムズ作品における主題やその小説手法を分析しながら、作家ジェイムズの道徳意識を探り、彼が目指した小説芸術がどのようなものであったのかを明らかにした。

本論で取り上げたジェイムズ作品は、1870 年代から 1900 年初頭にかけての、いわゆる世紀の転換期に書かれたものである。この時期は、アメリカ資本主義がきわめて急速に発展し、社会構造が劇的に変化した。そして紙の大量生産や印刷技術の向上により本の価格が低下しただけでなく、交通網の発達により、小説の流通ルートがアメリカ全土に拡大したことで、これまで上流階級に限られることの多かった読者層が、一気に一般大衆へと広がっていった。こうして大衆市場という概念が定着するに従って、文化は商業的なものとして市場社会で取引されるようになり、小説は商品として流通し、多くの読者の目にさらされるようになったのである。

このような社会状況の変化を念頭に、第１章で取り上げた『ホーソーン論』では、ホーソーンと彼の作品が備えている「地方性」や、ピューリタニズムの描き方に注がれたジェイムズの興味に着目した。そこにはホーソーンへの礼賛と批判が同居している様子が顕著であり、ジェイムズはホーソーンの「地方性」を賛美する一方で、セイレムに深く根ざすが故に地方限定的になっている点を惜しみ、それが、ホーソーン作品批判という形で表れている。しかしその批判は、ジェイムズが自身の小説において、新しいヨーロッパ的リアリズムを志向する中で生じたものであり、それ故『ホーソーン論』は、作家論という形を取りながら、同時にジェイムズ自身の文学的野望を盛り込んだものとなっている。つまり、『ホーソーン論』における賛否両論は、物質優先主義に傾く当時のアメリカにおける小説芸術の地位の低さを、国際的足場から見て否定するジェイムズの嘆きと、それを打破したいとする作家的野望の強さを反映したものだったのである。ジェイムズは、ホーソーン作品の限界を指摘しながら、『ホーソーン論』を通してこれからのアメリカ小説の発展とその理想的なあり方を模索していたのである。

第 2 章第 1 節では、前期作品の『ロデリック・ハドソン』と「マダム・ド・モーヴ」を取り上げ、「観察者」の役割を持つ人物の描かれ方に注目しながら、ジェイムズの道徳意識に迫った。『ロデリック・ハドソン』におけるローランド・マレットは、主人公ロデリック・ハドソンを観察する立場の副人物であるにもかかわらず、主人公と同等か、それ以上の存在感が与えられている。それは、ジェイムズがロデリックの人生を語るのに、ローランドの観察を通すことが重要だと考えたからに他ならない。しかしローランドの観察者としての役割には、他の人物たちの助けがなければ成り立たないような不十分な部分があり、この時期のジェイムズが観察者の役割を通じて道徳意識を伝える手法を試行錯誤していたことが窺える。しかし『ロデリック・ハドソン』とほぼ同時期に書かれた「マダム・ド・モーヴ」に登場する、観察者の役割を持つロングモアという副人物の心理はより克明に描かれ、ジェイムズの道徳意識を描く手法が成熟しつつあったことが見て取れる。すなわち、ジェイムズはこの二つの作品によって、観察者の心理描写そのものが物語を進行させるという手法を、荒削りながら確立していったと推察される。事実、これらの手法は、後期作品に顕著に見られるようになる、より精緻な心理描写につながっていくものである。またジェイムズがこれらの作品でこのような新しい、アメリカ独自の道徳意識の描き方をしたことは、アメリカ小説の新しい可能性を広げる試みであり、その意味においても、これら二作品はジェイムズの前期作品の中でも看過できない重要性を持っている。

第 2 章第 2 節では、禁欲主義を人生の指針とする男として読まれてきた、『使者たち』の主人公ストレザーが、生へ執着する態度を通して、より奔放に生きてみたいとする、自由への欲求を示す点に着目する。ストレザーは、根本的には禁欲主義的な道徳意識を持つ人物であるが、新しい世界の快楽的要素にも強く惹かれて、禁欲主義と自由への欲求との間で葛藤する。この、一種のせめぎあいとも言える奇妙な「二重意識」は、ジェイムズが得意とする小説手法の一つである「操り糸」や、小説の背景に使われる絵画的描写によって、一層顕著に表される。ジェイムズはストレザーの、この二重意識を通して、人間的な感情や欲求をある程度肯定しながらも、その欲望の行き過ぎに対して警告を発する。また、欲望に流されるだけではなく、そこに冷静な判断をも取り入れることで、より充実した生のあり方を探ろうとしているように見える。それは、パリで数々の自由を経験したストレザーが、禁欲主義に依存する故郷、ウーレットのピューリタン的禁欲主義に根ざした共同体を、時には客観的に見つめ直しているように、ジェイムズが、アメリカの繁栄に自信を得た後期作品のこの時期に至って、アメリカの富の意味や、アメリカの美徳とされてきたピューリタン的道徳主義を、見直そうとしていたからに違いない。

第 3 章第 1 節では、『アメリカ人』の主人公ニューマンの矛盾する性格を、ジェイムズの人物造形の曖昧さ故と片付けるのではなく、その矛盾がもたらされた原因を探ることで、ニューマンと富と、アメリカ人であることの意味を考察した。ニューマンは典型的なセルフメイドマンのアメリカ人として描かれ、成功を追い求めるアメリカン・アイデンティティを再確認させつつも、金銭的な成功が全てではないとする生き方を表して

いる。ジェイムズはそこに、自身の、作家としての金銭的成功を願う気持ちと、金銭に縛られず純粋に芸術を極めたいとする気持ちとの葛藤を投影しつつ、ニューマンの矛盾を複雑で人間味あふれるものとして肯定的に描いている。そして、ニューマンが金銭への執着から解放される最終場面には、ジェイムズが後々追求してゆく一つの理想形、すなわち自己犠牲の精神の優位性が明白に認められるのである。

第 3 章第 2 節では、『アスパンの手紙』を通して、ヨーロッパに創作活動の拠点を置いていたジェイムズが、アメリカ人の立場から、作品の舞台となる 19 世紀後半のヴェニスをどう見ていたのかを分析し、ジャーナリストである語り手の理想の在処と、その崩壊の意味について考察した。詩人の私生活を暴こうとうする語り手の願望には、ジャーナリストとしての使命感と、プライヴァシーを侵害するジャーナリズムの俗悪な面とが混在している。ジェイムズが、アメリカのジャーナリズムに対して必ずしも批判的な面だけを見ていたわけではないことは、作品の結末において、手紙を入手するためには「偽善と二枚舌」も意に介さなかった語り手が、愛のない結婚と引き換えにしてまでその行為を押し通すことはしなかったことにも窺える。ジェイムズはそこに最低限の道徳意識を示すことで、真実を追い求める行為の行き過ぎに歯止めをかけている。

第 3 章第 3 節では、『鳩の翼』の主人公ミリーと富との描かれ方を、彼女を取り巻く人々との関係や、その中で生じる心理的葛藤に着目して分析した。『鳩の翼』で国際テーマの扱いに再び向き合った晩年のジェイムズは、アメリカとヨーロッパの対立に焦点を置いていた前期作品とは異なり、ミリーを通して、両者に深い理解を示しつつ、新しい人間観や世界観を表現している。その結果、ミリーのアメリカ的な富は善悪の二項対立を越えて機能し、彼女の精神的魅力をより一層強めている。ここには、晩年のジェイムズが到達した、国際的題材や道徳意識に関する新たな境地を確かに見ることができる。

結論では、ジェイムズの描く道徳意識を振り返り、ジェイムズの主人公達が伝統的アメリカの道徳意識である、ピューリタニズム的禁欲主義から外れてゆく、人間的欲求や衝動を、二重意識や矛盾する行動を通して描いていることを再確認する。そしてジェイムズは、ホーソーンの時代から受け継がれたアメリカ的道徳を最低限保ち続けながらも、ホーソーンの時代よりも国際的な活躍ができる、新しい時代の人物の複雑な心理を、リアリズムという新しい手法を取り入れて示すことで、ホーソーンを超える、アメリカ独自の新しい小説スタイルを確立してゆこうと生涯努めていた、と主張する。

備考　要旨は，日本語 4,000 字以内又は英語 1,500 ワード以内とする。